海外臨床薬学研修　報告書

研修期間：令和６年２月 11 日～令和６年２月 24 日
所　　属：名城大学薬学部薬学科
学　　年：４年
学籍番号：200973109
氏　　名：宇野翔哉

１．参加目的

４年生であり、３か月後の５月中旬から始まる実務実習を前に、最先端のアメリカの薬学教育、病院・ドラックストア・調剤薬局の薬剤師、医療制度について実際に目で見て、聞いて、体験したいと思い、また、現役薬剤師である私の父・母からこれまで学んだことや、４年間の名城大学薬学部での学びと比較し、将来のイメージを持ちたいと思ったからである。これまで一度も海外経験がなく、今回の研修を機に、英語力やコミュニケーションスキルの向上、そして、幅広い視野をもち、更なる高みを目指す第一歩にしたいと感じたことが大きなきっかけである。

２．研修内容

【研修テーマ】アメリカの薬学教育、医療事情を知る。アメリカ文化を学ぶ。

【研修内容の詳細】アリゾナ大学薬学部での講義、病院見学、大手薬局チェーン（CVS Pharmacy）訪問、アリゾナ州ツーソンでの文化的体験（砂漠植物園、アートミュージアム、国立公園、砂漠博物館）、アメリカの食文化・スポーツに触れる。

【研修日程】

2 月 11 日	セントレア集合、成田、ロサンゼルスを経由し、アリゾナ州ツーソンへ
2 月 12 日	オリエンテーション、講義（米国の薬学教育）、振り返りミーティング（22 日まで毎晩実施）
2 月 13 日	講義（RS ウイルス）
2 月 14 日	講義（感染症と HIV/AIDS の薬局での実践，医薬品情報他）
2 月 15 日	午前文化的体験(サンフランシスコ・ザビエル伝道教会見学)、午後講義（科学的根拠の基づいた医療パート 1）
2 月 16 日	文化的体験(アリゾナ砂漠植物園、アートミュージアム見学)
2 月 17 日	文化的体験(サガロ国立公園西，アリゾナソノラ砂漠博物館他)
2 月 18 日	文化的体験(ハイキング、女子バスケットボール観戦、アリゾナ大学の学生との懇親)
2 月 19 日	アリゾナ大学メインキャンパス（ツーソン）ツアー、病院見学、講義（頭痛と片頭痛，甲状腺嵐他）
2 月 20 日	アリゾナ大学フェニックス校にて講義（公衆衛生における薬局，リップクリームづくり他)、アリゾナ大学の学生との懇親
2 月 21 日	アメリカ大手薬局チェーン（CVS Pharmacy）訪問、講義（科学的根拠に基づいたパート 2，急性せん妄の理解他）
2 月 22 日	講義（老人薬局業務，ヘルスケアシステム)、ファーマシーミュージアム見学
2 月 23/24 日	ホテル出発、ツーソン、ロサンゼルス、成田（24 日）を経由し、セントレアに到着

３．感想

本研修では、貴重な経験ができた濃密な2週間だった。海外渡航が初めてであった私は、パスポートの作成から、国際線、入国審査など現地で研修が始まるまで不安ばかりだった。先生方をはじめ、一緒に研修に参加した仲間、静岡県立大学、神戸薬科大学、そしてアリゾナ大学の学生など多くの人に支えられ、無事、研修を終え、日本に帰国することができた。

アメリカの医療を学び、感じたことは、日本のように国民皆保険ではないため、所得格差により、医療サービスを容易に受けられる人とそうでない人に分かれ、医療アクセスの不平等が問題となっていることである。多くの国民は子供が熱を出したら近くのクリニックなどに受診するといったことができないのである。また、薬剤師が患者の意見を聞き、後発医薬品の希望を出しても医師が認めないことも多く、患者自身が自分に合うかかりつけ医を持つことの重要性を感じた。アメリカでも高齢者に対する医療の取り組みが行われつつあるようだが、日本は超高齢社会であり、アメリカとは同様の医療を行うことは難しいと感じた。薬物動態学的な面で見ても、アメリカでは日本に比べ、多種多様な人種の人がいるため、肝臓や腎臓の機能における吸収、代謝、排泄や個々のタンパク結合率の変化など、よりいっそう個人差に注意しなければならないのだと感じた。

次に、アメリカでは薬剤師の仕事の多くが日本以上に“ファーマシーテクニシャン”と呼ばれる技術スタッフも導入されていることを知った。訪問したアメリカの最大の薬局チェーン（CVS Pharmacy）では前者が薬剤師の人数に対し3倍多く雇用されており、病院の薬剤部では計数調剤だけでなく計量や混合まで行われ、対人業務を拡充させる目的である。これは、日本の薬生総発0402第1号の通知の範囲を超えており、薬剤師の専門性を守るために明確に区別されているのだと思うが、日本の薬剤師業務のあり方も今後、変わる可能性があり動向を注視していきたいと感じた。

その他、アメリカでは州ごとに大麻の規制が異なっており合法と認める州も少なくない点や薬剤師の国家試験の受験資格の 1 つであるインターンの必要な時間数も州によって異なっている。教養科目を学んだ後、日本の薬学部２年生にあたる段階から早期実習、３・４年生にあたる段階で実習、５年生にあたる段階で実務実習、卒業後にはレジデントと呼ばれる臨床薬剤師の専門性を高めるプログラムも日本以上に普及していた。この研修制度を受けることで、がんや外来薬局、救急医療、感染症など様々な分野で個々の専門性が高められるのだと感じた。アメリカ医療において薬剤師は日本よりも尊敬され、給料も高い。これから日本医療がますます発展していくためにも個々のスキルを磨いていくことが求められるのだと思う。

今回の研修を通して、５月から始まる実際の実習先で、アメリカの病院・薬局で見聞きし、学んだことと比較しながら実習を行い、語学力やコミュニケーション能力、知識、経験、スキルをさらに積み重ね、自己研鑽をし、自分の将来のイメージをつくっていきたい。

最後となりますが、研修に携わっていただいた全ての方々にこの場をお借りし、感謝申し上げます。